



論座 > 文化・エンタメ > 記事一覧 > 記事

文化・エンタメ

浜田雅功「黒塗りメイク」論争を再考する

「ブラックフェイス」は、“忌まわしき過去の象徴”

赤尾千波 富山大学人文学部人文学科教授(アメリカ文学・文化専攻)

映画 | 黒人差別

2018年02月06日



「絶対に笑ってはいけない アメリカンポリス24時！」(日本テレビ系)で、顔を黒く塗って登場した浜田雅功さん=テレビ画面から

アメリカ映画が誇る特殊メイクの先陣は「人種メイク」

つい先日発表されたアカデミー賞ノミネートでは、メイクアップ &ヘアスタイリング賞部門に、日本人の特殊メイク・アーティストで芸術家の辻一弘氏の名前があがった。映画『ウィンストン・チャーチル/ヒトラーから世界を救った男』で、ウィントン・チャーチルの、卓越したそっくりさんメイクをゲイリー・オールドマンに施したことに対するノミネートである。

ハリウッド映画とえば、特殊メイクを思い出す人も多いであろうが、今回の辻メイクは、いかに本人らしく変身させたかという、リアルな巧みさ、がポイントであった。

編集部から

「論座アーカイブ」開設のお知らせ

2023年07月21日

論座の更新を終了いたしました
サイトは7月まで閲覧できます


2023年04月26日


コメント投稿サービス終了のお知らせ

2023年04月21日

最新ランキング 週間ランキング

- 渡辺麻友の電撃引退に納得。彼女は「アイドルのプロ」だけじゃなかった
- 死後の世界をめぐるとんちと人々の“ズレ”~人は死んだらどこへ行くのか?
- 新潟親子遭難死は救えた命かもしれない
- 手記・上高地でクマに襲われた私の経験
- 在NY、新型コロナ感染体験記——「軽症」だったが初めて死を意識した
- [1] 冷戦下、断絶と疎外の社会に変革を告げた~「サウンド・オブ・サイレンス」
- 事故原発に首相、作業員「怒ってるよ、菅直人、何しに？」
- ダムに沈んだ村に最後まで住んでいた一

9  民主党政権が失敗に終わった本当の理由～悪いのは「マニフェスト」ではない

10  AIが感情と意識を持つことは可能か

もっと見る

一方、お笑い番組「ダウンタウンのガキの使いやあらへんで！」の年末番組「絶対に笑ってはいけない アメリカンポリス24時！」（日本テレビ系）でダウンタウンの浜田雅功が映画『ビバリーヒルズ・コップ』でエディ・マーフィが演じた黒人警察官のそっくりさんとして登場した件は、「黒塗りメイク」の是非を巡って論争が続いている。同じメイクでありつつ、片やアカデミー賞ノミネート、片や人種差別に当たるかどうかで、日本人が一時、世界注視の的となったわけである。

本稿では、アメリカ映画の「人種メイク」を紹介しながら、この問題を再考してみたい。

リアルなメイクでも単なる黒塗りでもないブラックフェイス

「ブラックフェイス」と呼ばれるメイクのルーツは、19世紀アメリカで白人が“愚かな黒人”を演じて人気を博した大衆劇 minstrel・ショーにまでさかのぼることができる。

注意したいのは、ブラックフェイスとは、浜ちゃんのように単に黒人に扮する、という意味ではないし、辻氏のように「本人そっくりにメイクする」という意味でもないということである。アメリカで、白人の素人役者が、“黒人らしさ”を誇張し、悪趣味な演技をする際のお約束であった即席メイク、それがブラックフェイスであり、キャラクターの一部になっているのである。具体的には、焼いたコルクの炭を使って顔を極端に黒く塗り、唇には大きく白または赤で「タラコ唇」を描いた。稚拙ではあるが、一種の特殊メイクと言ってよい。

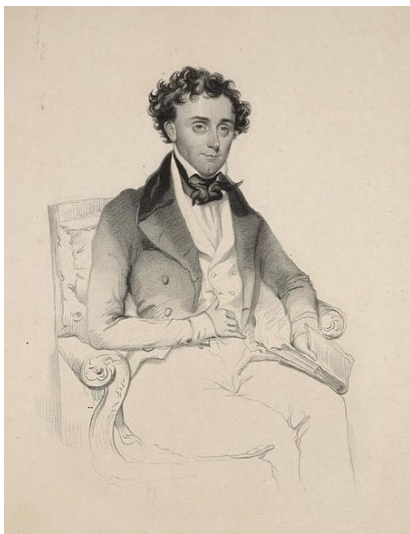
ブラックフェイスでダンスや寸劇などを演じるうちに、観客受けの良い、人気キャラクターが誕生する——気のいいだけの爺や（Uncle Tom アンクル・トム）、太って陽気な乳母（Mammy マミー）、マヌケな若者（Coon クーン<Raccoon> = アライグマの略称で、若い黒人男性を動物に例えたもの）、そしてクーンの子供時代の悪ガキ（Pickaninny ピカニーニ）である。こうした定番キャラクターを演じる者と観客（どちらも白人）が、いわば仲間うちで、黒人をネタにして、貶め、ライブ感あふれる「嗤い」を分かち合う大衆劇、それが minstrel・ショーの実態であり、一時期、ブームとなったのである。

こうした minstrel・ショーのキャラクターのなかでも、浜ちゃんの黒塗りメイクと、特に似ているのは、若い黒人男性キャラクターのクーンである。



【写真1】1900年当時の minstrel・ショーのポスター。白人役者（左）と彼が演じたクーン（右）。浜ちゃんの黒塗り顔とよく似ている
https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Minstrel_PosterBillyVanWare_edit.jpg

クーンの中でも特に人気を博したのは、ジム・クロウとジップ・クーンというキャラクターである。



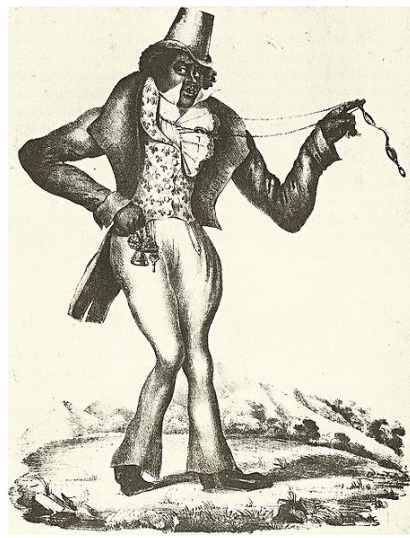
【写真2】ジム・クロウを演じたトーマス・ダートマス・ライス
https://commons.wikimedia.org/wiki/File:TD_Rice.jpg



【写真3】ジム・クロウ
<https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Jimcrow.jpg>



【写真4】 ジップ・クーンを演じたジョージ・ディクソン
https://commons.wikimedia.org/wiki/File:George_Washington_Dixon.jpg?uselang=ja



【写真5】 ジップ・クーン
https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Zip_Coon,_1834.jpg?uselang=ja

白人役者が演じた『国民の創生』の黒人ステレオタイプ



【写真6】 白人女性を襲い、KKKに捕まる黒人男性ガス
<https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Birth-of-a-nation-klan-and-black-man.jpg>

minstrel・ショーは、一時期大衆向け娯楽として白人に人気を博したが、すたれていき、やがて、映画にその座をとってかわられる。ブラックフェイスもまた、映画の世界に引き継がれていくのだが、映画においては「嗤い」の対象ではない、恐怖のブラックフェイスとも言うべき黒人キャラクターが誕生した。D.W.グリフィス監督の『国民の創生』（1915）と

いう長編無声映画である（[このサイト](#) で全編視聴可能）。

この映画には、前述のステレオタイプのほかに、白人を誘惑し、欺く混血人（Cunning Mulatto 狡猾なムラトー）、白人女性と結婚することに熱狂しストーカー的になる黒人男性（Brutal Black Buck 狂暴なバック）を加え、黒人のステレオタイプが勢ぞろいする。

では、この映画はいったい何のために“邪悪な黒人”を白人俳優に演じさせたのか。それは、この映画が白人至上主義団体KKKの宣伝映画であったからである。“愚かで、好色で、白人にとって脅威となる黒人”の存在を示して、白人（特に女性）を守る騎士団を自称するKKKの存在意義を強調し入団者を募る——それがこの映画の目的で

あった。黒人の姿をあざとく悪者として描くために、黒人の登場人物はすべて、ブラックフェイスの白人によって演じられた。

『国民の創生』は大ヒット作の誉れ高いが、こうしたブラックフェイスの黒人キャラクターは、公開当初から強く批判された。現在、一部の白人至上主義者の間で相変わらず人気があるものの、アメリカ人一般にとっては、もはやブラックフェイスもこの作品も、忌まわしき過去の象徴であり、 minstrel・ショーとともに、人種差別の歴史を振り返る良い教育材料となっている。

■ バイエ・マクニール氏の「心の声」

浜ちゃん黒塗りメイクに対し、最初に批判の声を上げたのは日本在住のアフリカン・アメリカン男性作家、バイエ・マクニール氏である。

「.....日本のテレビコメディや音楽でブラックフェイスを見るたび、見下されたような、馬鹿にされたような、そして表面だけを見られて、人間性を否定されているような気分になります」

「日本社会は、世界がブラックフェイスについてどんな議論をしているか、きちんと見てこなかったように思えます」


「しかし、.....『彼らは子供で、わかっていないだけ。だから我慢しなきゃ』とも思うのです」（[「ハフポスト日本版」](#) 1月3日）

こうしたマクニール氏のコメントは、ブラックフェイスの「負の歴史」の当事者としては当然のものであり、むしろ寛容すぎるくらいに思われる。

浜ちゃんは、上述の黒人に対する「差別の心ありありの」ブラックフェイスを目指したわけではないだろうが、写真で見ると両者がよく似ていることは明らかである。マクニール氏をはじめとする、 minstrel・ショーや映画のブラックフェイス、つまり黒塗りの顔で黒人をバカにした演技をする白人の姿を、“忌まわしき過去の象徴”として知っている人は、浜ちゃんの黒塗り顔の中に、それを見ただろうし、それを「今さらやってのけた無知と無神経さ」を嘆いたと言うべきかもしれない。

では、ブラックフェイスの背景事情を知らず、「ただ、黒人に扮したかっただけ」という理由で、黒塗りメイクをすることは許されるのだろうか。これに対するマクニール氏の答えは、NO！である。先のマクニール氏の「寛容さ」を誤解してはならない。彼は、日本人が「わかっていない」というのは、「知らなかった、ということとは違う」と続ける。

まず、歴史的事実として、1854年に来航したペリー提督がミンストレル・ショーを幕府の役人に披露したことを振り返り、それ以来、エノケン（榎本健一・日本の喜劇王）、シャネルズ（1980年代に活躍）、ゴスペラッツ（現在活動中）といったコメディアンやミュージシャンが、今に至るまで日本国内でブラックフェイスのパフォーマンスをしてきたことを指摘。幾度も反対運動があり、最近では2015年、フジテレビに対しゴスペラッツの黒塗りメイクをやめるよう5000人が署名、放映中止に至った——そうした事実を前に、ブラックフェイスへの抗議活動を「知らなかったという言い訳、日本にはブラックフェイスの歴史がないという言い訳は通用しない。ダメなのです」と言うのである（同・ハフポスト日本版）。

では、こうしたマクニール氏の「心の声」を聞いてもなお、ピンとこない、という人がいるとすれば、それはなぜか。この“噛み合わない議論”の根はどこにあるのだろうか。これを考えるために、次稿で、人種メイクとしての「イエローフェイス」を紹介したいと思う。（つづく）

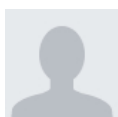
次の記事

関連記事



文化・エンタメ **続・浜田雅功「黒塗りメイク」論争を再考する**
赤尾千波 2018年02月07日

筆者



赤尾千波（あかお・ちなみ） 富山大学人文学部人文学科教授(アメリカ文学・文化専攻)

津田塾大学学芸学部英文学科卒。筑波大学大学院修士課程地域研究研究科、インディアナ大学大学院を経て、筑波大学大学院博士課程文芸・言語研究科途中退学。岐阜大学教育学部助手を経て現職。著書に『アメリカ映画に見る黒人ステレオタイプ——『国民の創生』から『アバター』まで』（富山大学出版会）など。 **研究室HP**、**アメリカ映画に見る黒人ステレオタイプ** [関連資料](#)

※プロフィールは、論座に執筆した当時のものです

朝日新聞社から

会社案内
CSR報告書
採用情報
記事や写真利用案内
新聞広告ガイド

デジタル事業から

デジタルサービス一覧
携帯サービス
Astand(コンテンツ販売)
法人向け配信
写真の購入案内
記事データベース案内
朝日ID

グループ企業

朝日新聞出版の本
朝日新聞出版(AERA dot.)
朝日インタラクティブ
朝日学生新聞社

各国語サイト (News in various languages)

The Asahi Shimbun Asia&Japan Watch
(ENGLISH)
Asahi Weekly (ENGLISH/JAPANESE)
ハフポスト日本版 (JAPANESE)
CNN.co.jp (JAPANESE)

[サイトマップ](#) | [サイトポリシー](#) | [利用規約](#) | [特定商取引](#) | [web広告ガイド](#) | [リンク](#) | [個人情報](#) | [著作権](#) | [お問い合わせ](#)

掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.